



エッセイ

## 科学の渚

SCA 4期 山田健太郎

インドネシアで一人暮らしを始め、1年が経った。今日は晴れの休日なので海辺に来ている。背後には世界有数の大都市ジャカルタ、目の前にはジャワ海が広がる。波打ち際に佇む若者や家族連れ。若い頃なら真っ先に裸足で海に入っていたかもしれないが、今は景色を楽しむだけで十分だ。そんな自分に、ふと過去の経験を重ねながら、思いついたことをスマホに打っている。

地球惑星科学の研究者から農業分野の公務員となり、10年目になる。異業種・異分野に転職したわけだが、幸い研究者出身の背景を活かしながら、仕事に取り組んでいる。基礎データの収集や政策の議論には、それぞれの科学分野の専門家の協力が欠かせない。自身の専門的知見を役立てることもあるし、専門家の意見を理解する能力を活かすこともある。科学は政策を検討する重要な道具の一つだ。

議論は決して一本道ではなく、複数の方向性が生じることもある。様々な正解がありうる中で、科学を活用しながら、一定の結論に落とし込まなければならない。今は国際機関に出向しているが、博士号は世界の共通免許で、科学は世界の共通言語であることを日本にいる時よりも強く感じる。ただ、科学が仕事道具の

一つに過ぎないのは日本と同じである。

思えば公務員になってからずっと、自分が科学とそれ以外の世界の境界にいるような気分を味わってきた。目の前に広がる科学の大海原に希望を抱き、若い頃は存分に泳いだと思う。しかし、泳ぎ続ける人生に疲れを感じ、陸へ上がったのだ。泳ぎ回ることが楽しい人もいるだろう。海が苦手で入りたくない人もいるだろう。私は今、科学の渚に立ちながら、寄せてくる波にほんのり触れることを楽しく感じる。科学の世界と公務員の世界を各々経験したからこそ、渚に立つ楽しさを知ることができたのかもしれない。目の前のジャワ海に触れてみると、少し冷たい。そろそろ夕暮れになるので、家へ帰ろう。

日本に残してきた子供たちは、最近図鑑を読むようになったという。そういえば、自分も小さい頃に読んだ図鑑がきっかけで化石と工作が大好きな少年になり、それが科学の大海原へ繰り出すことに繋がったのだった。親は海から上がってきたが、入れ違うように海へ繰り出そうとする子供たちと、今ともに科学の渚に立っている。子供たちの目に、大海原はどのように映っているのだろうか。

今号の「サイエンスコミュニケーターの声」でご紹介した小澤さんは、小学校教員から博物館職員へ転身されましたが、科博 SCA 会員の中には現役教員の方も多数いらっしゃいます。サイエンスコミュニケーションという視点で学校教育と社会教育をとらえると、相互に参考になる事柄も多いはず。科博 SCA が、そのような気づきを得る場の一つになれば、と思います。

科博 SAC の過去のイベントの実施内容は「科博 SCAblog」をご覧ください。  
<http://kahakusca.edoblog.net/>



科博 SCA の広報誌

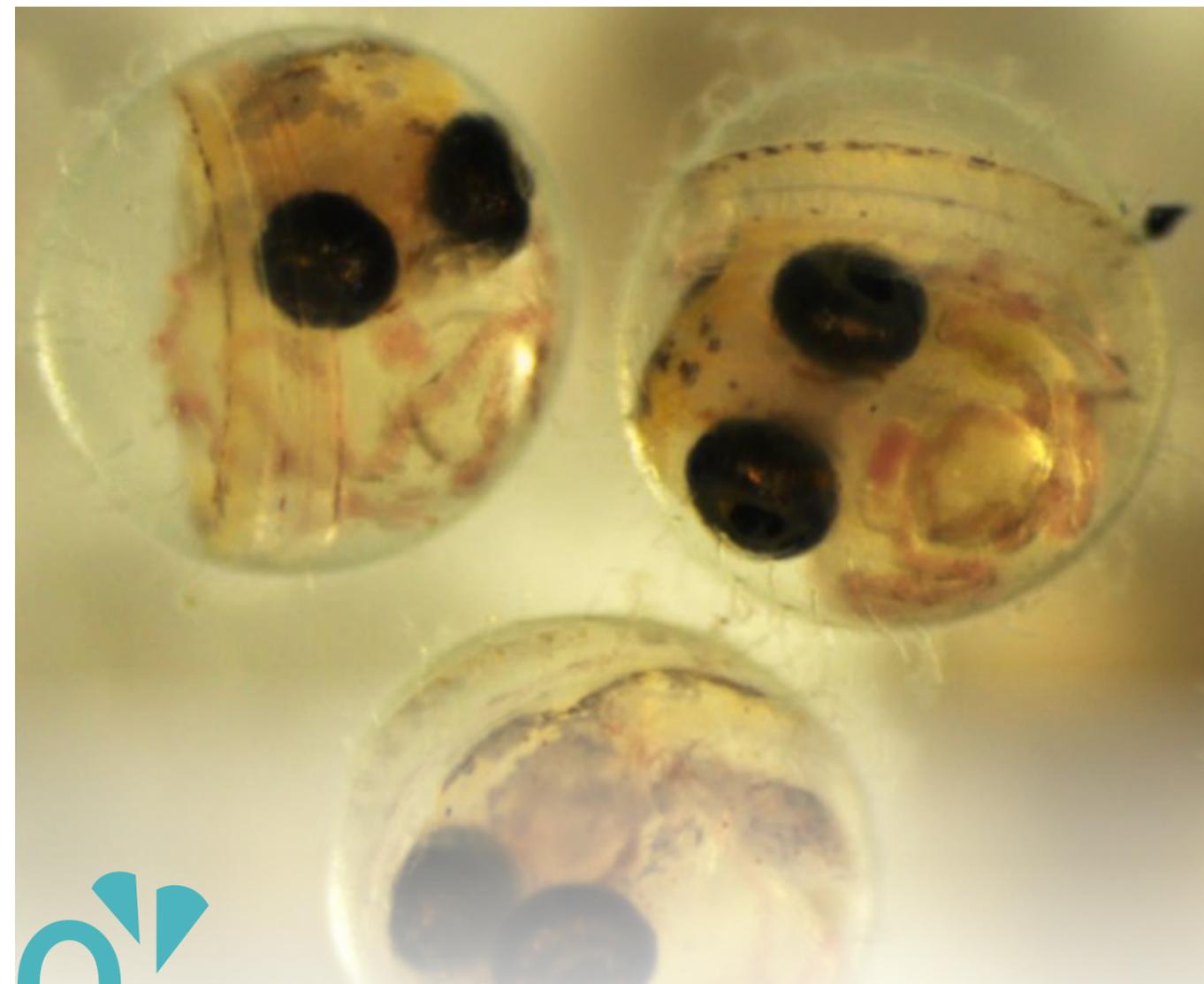
# サイエンス コミュニケーター だより

Volume 19

September 2024



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）」を開講し、その修了生は350名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



## Question 表紙クイズ

### 誰の赤ちゃん？

- ①カエル ②サケ ③メダカ

撮影：松崎ゆり子（SC 講座 13期）

開いて  
答えを  
確認！

# サイエンスコミュニケーターの こえ声



小澤鷹弥  
Takaya Ozawa

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了(12期)。小学校教諭から紆余曲折を経て、現在はふなばし三番瀬環境学習館に勤務する、東京湾の干潟の魅力伝える科学コミュニケーター。館内外で生きものや漂着物の解説をするのが生きがい。

## 何回でも足を運びたい、地域の社会学習施設を目指して

Q. これまでどんなお仕事をされてきたのでしょうか？

A. 学校教育から社会教育へと、業務をシフトしてきました。

大学では教育学を専攻し、卒業後は小学校教員になりました。3年間勤めましたが、次第に学校教育より社会教育の道を模索したいと思うようになり、2年間の大学院生活を経て、葛西臨海水族園に入職しました。同園では、教育普及を中心として実に多様な業務に携わりました。現職のふなばし三番瀬環境学習館には、2017年の開館当初より科学コミュニケーターとして勤務しています。学校教育プログラムの開発、企画展・特別展のプロジェクトマネジメントのほか、干潟の生き物観察や魚の解剖などのワークショップ運営などが主な業務です。

Q. SC 講座を受講したきっかけと、  
受講を通して得られたことを教えてください。

A. 後任育成のために講座を受講し、科学の様々な伝え方を学びました。

これまでの実践経験から得たノウハウや経験知を後輩に伝えるために、科学コミュニケーションを体系的に学びたいと思って受講しました。当時の私は、生き物についてお客さまに面白く話すことには自信があった一方で、組織内で科学コミュニケーションを専任するにあたり、科学コミュニケーションと

は何なのか、学問として学ぶ必要があると感じたのです。そこで、現職に就いた1年目の時に、SC 講座を受講しました。実際に講座を受講してみると、たくさんの個性的で面白い仲間と出会うことができました。他の実践者がどういう気持ちで科学コミュニケーションと向き合っているのかを知り、多様な切り口で科学を伝える方法を学ぶことができた点は、後輩の指導にも役立っています。

Q. 科学コミュニケーションの現場で、  
大切にしていることはありますか？

A. 社会教育施設として、お客さま一人一人とのコミュニケーションを大切にしています。

まずはお客さまに楽しんでいただくこと、そしてお話しする中で興味を引き出し、もう一回来館してもらうことを目指しています。また、学校教育の中ではカバーできない、社会教育施設としての役割を担うことも意識しています。過去に印象深い出会いがありました。干潟の生きもの観察会に参加した小学生がいたんですが、冬の開催だったこともあり、全く生き物を見つけられなかった。それきりかな、と思っていたら、後日、自分で干潟に行き、生き物を見つけに来てくれたんです。あとで聞いたところ、生き物に出会えなかったのが悔しかったそうでした。私は、せっかく来てくれたのだから、と、見つけた生き物を褒めるなど、色々とお話をしました。するとどんどんのめり込んでくれて、私も見たことがないような生き物を捕まえてもってくるようになり、なんと1年後には自由研究で賞まで獲得しました。実は私は来館者の顔を覚えるのが苦手なのですが、その小学生は印象に残っていたので、2回目の来館のときに意識して声かけをし、結果的にその子が大きく伸びるきっかけになったのです。それ以降は特に、何度も足を運んでもらうためのコミュニケーションを意識するようになりました。

Q. 今後、どんなことに挑戦したいですか？

A. 科学コミュニケーションのノウハウを体系化してみたいです。

これからも、どうしたら来館したお客さまに対して生き物や三番瀬の魅力を伝えられるかを考えながら、科学コミュニケーションを実践していきたいです。その手段として、お客さまの興味・関心に合わせながら科学を伝える方法論を、自分なりに体系立てながらまとめたいと思っています。もちろん、何かを伝える方法は無数に存在しますが、上手い伝え方にはきっと共通項があるはず。お客さまの属性等に合わせて、話し方を工夫することもできると思います。それらを一般化したり、これまで自分が無意識に行ってきた伝えるノウハウを言語化したりすることで、今後の科学コミュニケーションの担い手に伝えていくことも挑戦していきたいです。

## Answer 表紙クイズの答え ③メダカ

これはメダカの赤ちゃんです。表紙の写真は受精後6日、卵の直径は約1mm。もうじき孵化します。大きな目が時々クリクリと動き愛らしいです。血球の流れや心臓の動きも確認できます。孵化後もしばらくおなかの栄養で生きられ、徐々に自分で餌を取ります。日本の冬から夏(4℃から40℃)を生き延びることができる飼育しやすい魚です。

